

尖閣諸島盛衰記

なぜ突如、古賀村は消え失せた？



**古賀村を
知らずして
尖閣を
語るな!!**

明治期古賀氏による尖閣諸島の開拓事業は、歴史に残る一大偉業です。絶海の孤島の利を活かし、海鳥事業、鰹節製造等がなされ、開拓根拠地・古賀村には、開拓民二百人余を擁し、繁栄と殷賑を極めていました。ところが、大正初年に、古賀村は、忽然と消え失せてしまったのです!! これが尖閣開拓の最大の謎で、古賀氏が尖閣から撤退した所以です。

尖閣問題の混迷は、開拓の歴史に対する認識不足にあります。本書は、尖閣問題の真相、問題解決の鍵を示す必見の書です。

I、「嗚呼 是れ古賀の王国にあらずや」

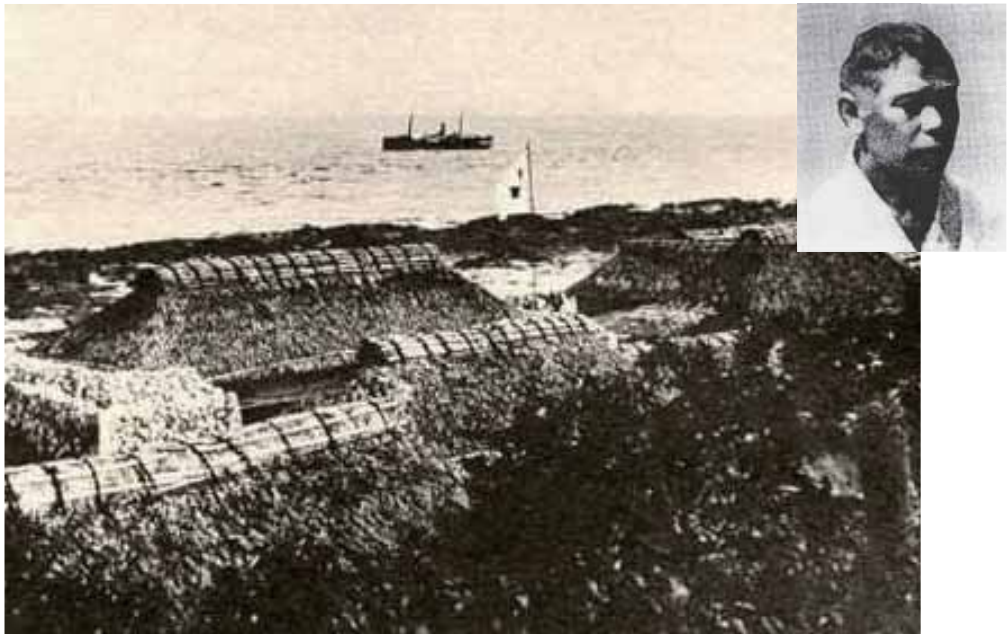
1、魚釣島古賀村

明治 41 年 5 月、尖閣諸島を訪れた宮田漏溪(琉球新報主筆)は、魚釣島の古賀村を見て、「嗚呼、是れ古賀氏の王国にあらずや」と讚嘆している。

飢餓の島魚釣島の岩場は、切り開かれて、3 千余坪余る広大な敷地に、事業所建物が立ち並び、後方山地の原生林は伐り倒され、面積 60 町歩余の開墾地が現出し、実り豊かな島へ変貌を遂げ、列島開拓本拠地古賀村は、移住民 240 余名、戸数 99 戸と殷賑極めていた。

「其の財を費やすこと三拾餘万円、年月を積むこと二拾有五年。尖閣列島の經營者たる古賀辰四郎氏が、單身創業的の勇氣を揮つて全列島の爲め尽し來たれるもの亦た至れりと云はざるべからず」・「全氏が明治十七年初めて人を搓し全列島を探検し、愈々經營すべきを確信したるより以來、今茲明治四十一年に至る迄、二拾有五春秋間の經歷・・開拓せんことに向つて努力、勇闘を續け來りたるの事歴を詳知せるものは、・・古賀氏の一王国と称するは、異言なかるべきにあらずや」。

(琉球新報「尖閣列島と古賀辰四郎氏」一～九 宮田漏溪 明治 42.6.15～27)



山の手から開拓本拠地賀村の家並みを望む。中央には日の丸がヘンボンと翻っている。両脇の建物：左は鯉釜納屋、右は開拓本部事務所。上：古賀辰四郎。(明治 41 年撮影)

では、古賀が開拓した尖閣諸島はどんな島か見てみよう。

岩山切り開き 平地3千坪造成 堅固な石垣驕らし 家屋を建設

魚釣島・古賀村は、海岸部の凸凹起伏の岩礁を切り開き、3千坪の平らな地盤に、開拓本拠地として魚釣島事業所建物が建てられた。ここは西側から吹き来る風は猛烈を極め、時には高波、高潮を巻き起こして襲いかかるので、海岸には防波堤を築き、堅固な石積みを驕らして、安全を図らねばならなかった。

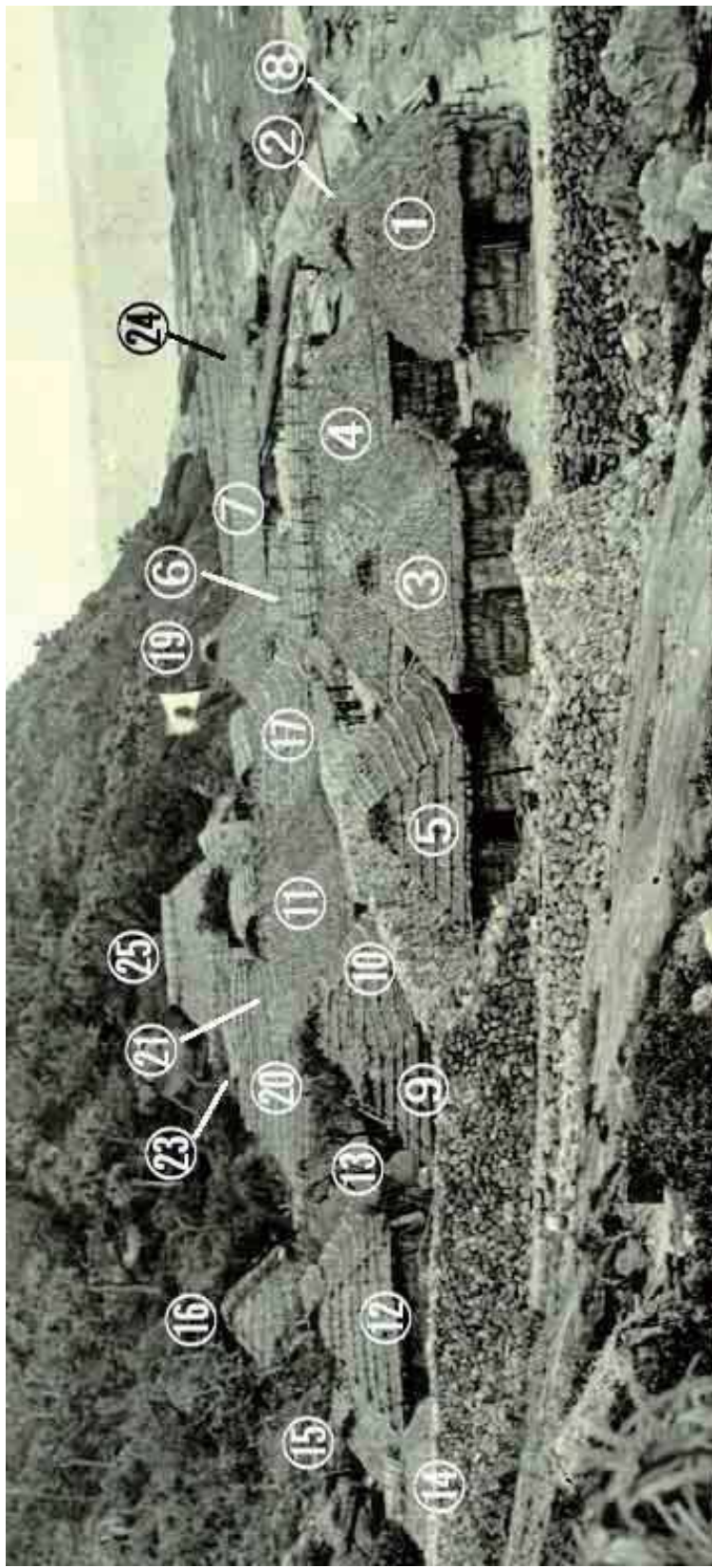
“明治40年代・古賀辰四郎作製”と記された建物配置図、即ち「和平山建物配置平面図」がある。この配置図の出典は不明だが、明治42年の「藍綬褒章下賜ノ件」に関わる資料として作製されたものと思われる。古賀の列島開拓は、その頃には大きな進展を見せ、鳥剥製とカツオ漁・節製造に力が注がれていた。

前者の鳥剥製事業の中心は南小島古賀村であり、魚釣島はカツオ漁・節製造である。

この建物配置図には、事業所本部（和平山事務所）があり、水産物採取とカツオ漁・節製造事業所建物が主である。作業場、鯨切場、鯨仕事場、女工場、鍛冶屋場、鯨釜納屋、塩焚屋とある。また住屋は、陸員住屋、海質？住屋、女工場住屋、小供住屋、製造人住屋、漁師住屋とあり、倉庫3棟、雑庫2棟、保存倉庫、鯨倉、石倉、製造道具小屋、火薬庫、等々がある。浴場も、労働者浴場、事務所湯風呂、漁夫浴場と仕分けされ、食堂も賄所：労働者食堂、労働者賄所、製造人賄所、漁師賄所、女工賄所とあり、機能的に分化されて建てられていることが分かる。



明治41年和平山（魚釣島）事務所。真ん中に古賀辰四郎がいる。（「藍綬褒章下賜の件」より）



- A地区(石積み～防波堤)：①鍛冶屋場・仕事場 ②陸員住屋 ③倉庫 ④作業場
 ⑤倉庫・海質住屋 ⑥労働者食堂 ⑦造船乗船小屋 ⑧船乗上場入口
 B地区(後背地高台西側)：⑨倉庫 ⑩雑庫 ⑪事務所 ⑫小供住居
 ⑬女工場同住屋 ⑭事務所湯風呂 ⑮女工場同住屋別棟？ ⑯客室
 C地区(後背地高台中央)：⑰鯉釜納屋 ⑱漁夫浴場(*) ⑲二階附製造人住家
 ⑳鯉切場 ㉑二階附鯉住屋・賭所 ㉒薪小屋(*) ㉓二階附鯉倉
 D地区(東側斜面～海岸)：㉔漁師住屋・賭所 ㉕保存倉庫

(*)：上掲写真では隠れて見えない、次掲写真を参照



②陸員住屋 ⑥労働者食堂 ⑩雑庫 ⑪事務所 ⑬二階附製造人住家
 ⑭二階附製造人住家 ⑯二階附製造人住家 ⑰二階附製造人住家
 ⑱二階附製造人住家 ⑲二階附製造人住家 ⑳二階附製造人住家
 ㉑二階附製造人住家 ㉒二階附製造人住家 ㉓二階附製造人住家

Ⅲ、古賀村に異変？

1、突如、古賀村消息絶える 尖閣諸島に何が？

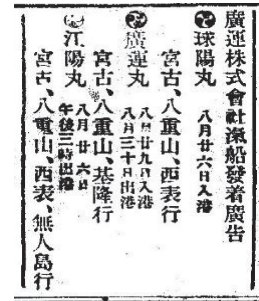
江陽丸・発着広告最後に 尖閣便船絶える 古賀村の消息も

明治44年8月26日江陽丸は午後3時出港、「宮古、八重山、西表、無人島行」である。

これを最後に、尖閣諸島行きの発着広告はプツリと切れている。

また、45年(大正元年)以降、古賀村の消息は新聞紙面から消えている。41年5月には、新聞人、知名士が大挙渡島した。宮田漏溪は、「ああ、これ古賀の王国にあらずや」と感動して現地レポートした。翌年末には藍綬褒章授与である。これを契機に古賀の列島経営は内外から関心と呼ぶところとなった。

古賀もこれから本領発揮だとして、次々と構想を打ち出し、大きな展開を見せていた。渡島者も増加し、尖閣諸島の開拓状況は、頻繁に報じられ、紙面を賑わすはずだった。どこ探しても列島経営の記事は見当たらない。古賀個人の動向は時々報じているが、古賀村となると全く不明である。藍綬褒章を授与されて、僅か2年8か月後である。なぜ、突然、尖閣諸島の情報は途絶えたのか。古賀村の消息は秘密のベールに覆われてしまっていた。



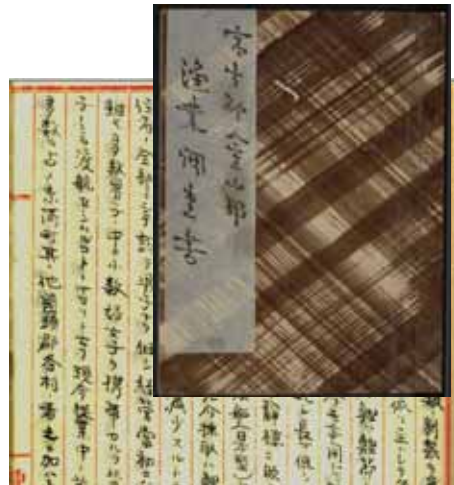
明治44年8月最後の船発着広告（琉新.8.20）

“大正2年漁業報告” 在住者漁夫52名 統て男子なり

ところが、意外の所から情報は得られた。大正2年頃にまとめられた「宮古郡八重山郡漁業調査書」（著者不詳）からである。

予期せぬ内容だった。本文の一部を記すと。

住民ノ職業ハ着手當初ハ主トシテ鳥類ノ剥製ヲ為シタリト雖モ其ノ後漁業ノ有利ナルト鳥類捕獲ノ数減少シタルニ依リ、主トシテ漁業ニ従事セリ。・・・大正二年中該漁業ニ従事スルハ漁船（日本型）二隻漁業者五十二人ナリ。内製造ニ従事スルモノ七人ナリ。鱧釣及夜光介採集ハ鰹釣漁業終了后テ於テ營ムモノニシテ、夜光介八年々其産額ヲ減少スルト云フ。前記漁夫ハ本嶋在住者ノ全部ニシテ総テ男子ナリ。但シ經營當初ニハ女子モ渡航セシメタリト雖モ多数男子ノ中ニ少数婦女子ヲ携帶セルヲ以テ弊風ヲ生シ弥后全ク男子ノミヲ渡航セシムルコトナセリト云フ。



宮古郡八重山郡漁業調査書:大正2年頃編纂・著者不詳（「琉球大学図書館サイト」より）

2、神隠しに遭ったのか 移住民・家屋群 どこに消えた？

200 余名いた永久移住者 どこに消え失せた 神隠しに遭った？

明治 40 年には、永住民総数 248 名、永住者 99 戸を数えた。翌 41 年、11 名の児童も東北から移住してきた。43 年 4 月には尖閣諸島に上陸視察した農学博士玉利喜造(鹿児島高農校長は、「去年十月以来百数十人の歳越しを爲さしめたるか如き實に容易のことにあらず。之を能く維持して行かるゝ点は感服なり。」(琉球新報 明治 43.4.19) と述べている。

また、古賀は、明治 41 年以降 5 ヶ年予算書(計画書)では、“漁業：鯉船 20 艘、珊瑚船 20 艘”、“鯉業監督者 3 人漁夫 220 人珊瑚採取者 100 人”、“海鳥剥製業：監督者 3 人剥製者 150 人”を打ち出しているが、これを差っ引いても、優に 200 名余り永住民がいたであろう。

ここで、改めて「鯉釜納屋前」と「事務所前」の記念写真を見てみよう。前者の右方を拡大したものが下の写真。上半身裸で、ねじり鉢巻き姿をした男たちも写っている。

後方の石積みにも束ね立掛けてあるのはカツオ釣りに使う竹竿か？ 前に転がっている丸太は船揚げ用のコロである。ここに立ち並んだ男たちは面構えからして海の男たちに間違いない。この中に、カツオ船の漁師も、カツオ節工場の製造人、サメやべつ甲亀採捕や造船場の船大工も混じっているかも知れない。

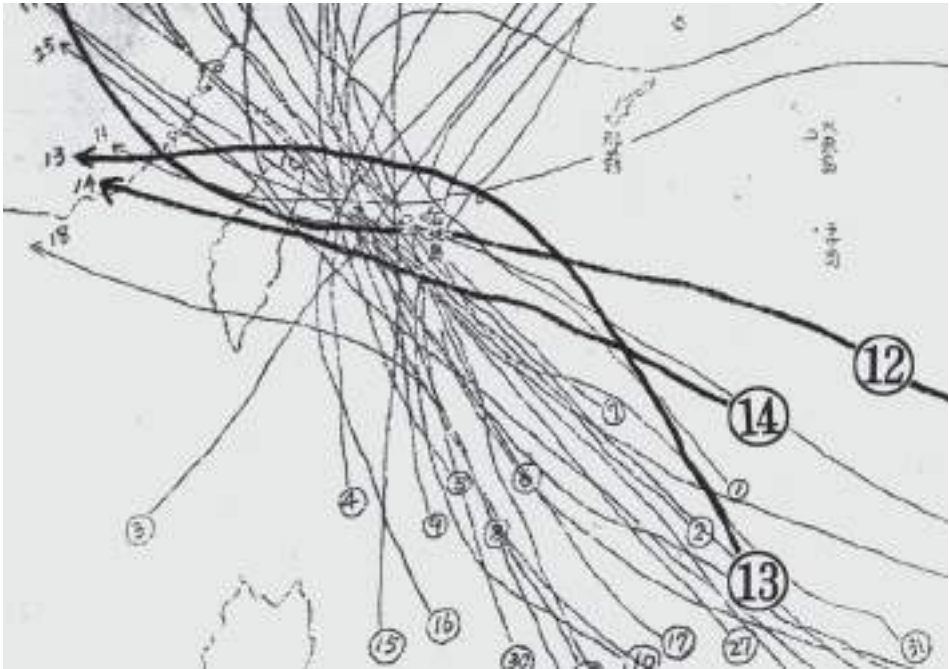


ねじり鉢巻き姿で立ち並んでいる面構えからして、荒くれ者の海の男たちか？ 当時カツオ漁は最先端の漁業であり、これに勤んでいる男たちの誇りと気概が感じられる。(明治 41 年)

古賀村は海の男たちだけでなく、陸(おか)の男も必要である。鳥毛採取の入夫、剥製作りの職人だけでなく一般労働者も大勢いたはずである。山林開発や耕作地開墾に加えて、古賀村の土木や建築工事は、大勢の人間とその技に長けた者たちを擁していたであろう。

そうでなければ、絶海の孤島という厳しい条件の中で、あれだけ見事なものは造れない。

この中から明治 44 年から大正元年間に発生した台風の進路図を見ると、尖閣諸島を襲った台風は、3 個に絞られた。瀬名波が付した番号 12～14 を筆者が太線で示した。



石垣島を襲った顕著な 31 個の台風進路（明治 34 年 8 月～昭和 8 年 9 月）
 （「石垣島の顕著台風 瀬名波長宣 気象庁調査報告第二号 昭和 23 年 3 月」より）

この 3 個に該当する台風を前表「石垣島気象災害資料」から抜き出してみた。

下表がそれである。

12	明 44 8/31	956.3	SSW31.0	224.5	沖縄南方海上を経て西進、石垣島付近を経て大陸に入る
⑬	明 45 8/28	964.3	WSW 35.6	229.6	ルソン島東方海上から北西に進み石垣島北東 100 ㌫以内で西北西に転じ北方西進被害記録なし 台湾北部風水害甚大
14	明 45 9/16	981.0	ESE34.7	127.8	石垣島南方 100 ㌫以内を西進、台湾中部に上陸

なお、瀬名波の資料と災害資料とでは最低気圧・方位などに若干の違いはある。

この中で、⑬が尖閣諸島に接近した台風であることが分る。

明治 44 年～大正元年間に、尖閣諸島を襲った台風は、これ 1 個だけである

これを尖閣諸島の地図に書き写して見た。

筆者の手書きなので、瀬名波の進路と少しズレはあるかもしれない。

ともかくも、台風の進路を見ると石垣島北東 100 ㌫以内で西北西に転じ、尖閣諸島の遙か南方海上を台湾に向けて西進した。

4、撤退後の古賀村 どうなった？ （大正期）

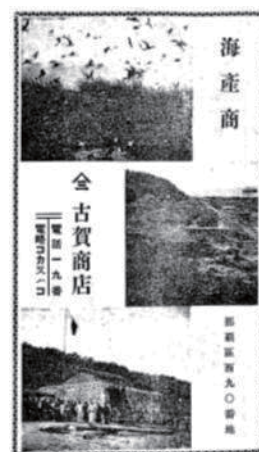


水路誌の記述 昭和初期まで 大正4年見聞記 踏襲、古賀村はどうなっていたのだろうか。関係の資料を探してみた。古賀辰四郎の動向を報じた新聞資料はあるが、古賀村の消息はない。もしや水路誌にあるかもと考え、水路誌を揃えて調べてみた。

- 1、日本水路誌第二卷下（明治41年10月刊）
- 2、日本水路誌第六卷（大正5年刊）。
- 3、日本水路誌第六卷改版（大正8年7月刊刊）
- 4、臺灣南西諸島沿岸水路誌（昭和5年12月刊）
- 5、臺灣南西諸島沿岸水路誌改版（昭和7年7月刊）
- 6、臺灣南西諸島沿岸水路（昭和16年3月刊）

1には、古賀村の記述ない。2は大正4年の見聞記をもとには古賀村のようすを記述してある。2から7まで、ほぼ同じ内容である。

例えば6に「此处（掘割の意）ニ舟捲揚機ヲ備フ」とあり、昭和16年まで見聞記をそのまま踏襲している。



古賀村の様子を紹介した最後の古賀商店広告。
〈「沖縄県案内 大正3年 親泊朝權著より」〉

大正7,8年頃 70人ほど住む？ 中国難破船 救助

先に述べた岩崎卓爾の「ひるぎの一葉」には、「嶼附近鯉魚群集スル事多ク現時六十九人住ミ漁勞セリ」とある。この本が大正8年刊行であるからして、大正7,8年には、漁期には70名ほど住んでいたことが分かる。

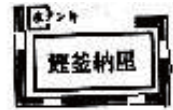
V、魚釣島古賀村(跡) その後の歩み (昭和期)

1、戦時中 昭和14年南西諸島資源調査団、魚釣島に上陸

カツオ工場跡 漁師が建てた納屋あり、ここに宿泊・調査する。

昭和期に入り、尖閣諸島の学術調査が行われるようになった。魚釣島・古賀村のその後の歩みについては、これら調査団関係者が撮った写真で見ていこう。

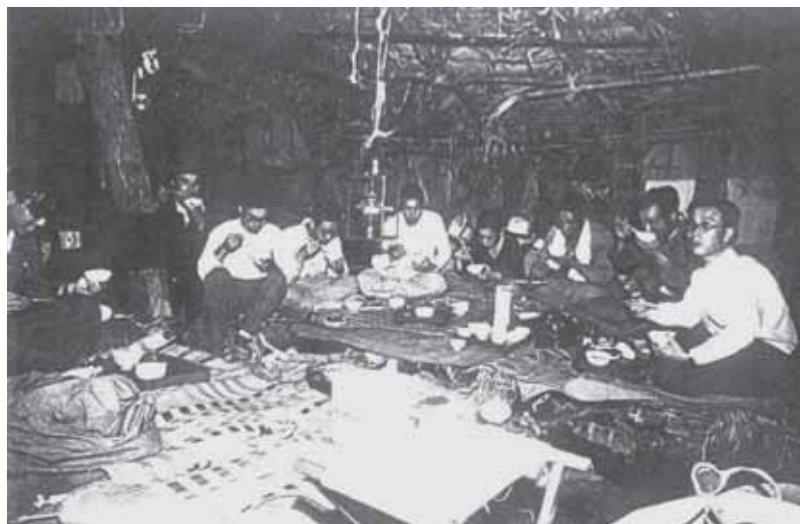
昭和14年、農林省南西諸島資源調査団が尖閣5島に上陸した。古賀村跡を本拠地にして魚釣島を調査した。下の写真はその時に宿营地となった納屋である。堅牢な石垣に囲まれていることから、漁師たちが鰹窯納屋(カツオ工場)跡に建てたことが分かる。



「見聞記」にある小舎はこのような納屋だったろう。俄か作りの粗末な納屋が5つほどある。配置図に記された水タンクも見える。
(正木譲提供)

殆ど壊れかけていたが、寝起きはできる納屋もあったようだ。

納屋の中で、食事を摂る調査団一行。 (同上)



4、戦後 魚釣島・古賀村跡 宿営地に 連綿と調査

1952年富源を求めて、琉球大学・琉球政府資源局の合同調査団

戦後の尖閣調査は、高良の1次から5次に亘る調査に続き、多くの調査がなされた。

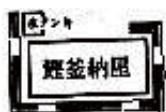
その際魚釣島古賀村跡は、調査団の宿営地として利用されている。

調査団が撮影した写真をもとに、古賀村跡の様子を見ていくことにする。

鯉釜納屋の石積み “古賀村跡”のシンボルとなる



1952年戦後初の鯉釜納屋石積み写真。絶海の孤島に城砦の如く屹立した姿は感銘を与えた。“列島開拓・古賀村跡”のシンボルとして親しまれる存在となる。(新垣秀雄 1952)



正面楼門前でテッポウユリを手にはしているのは高良鉄夫団長。
石積み天辺部分が崩落していることが分かる。
(多和田真淳 1952)

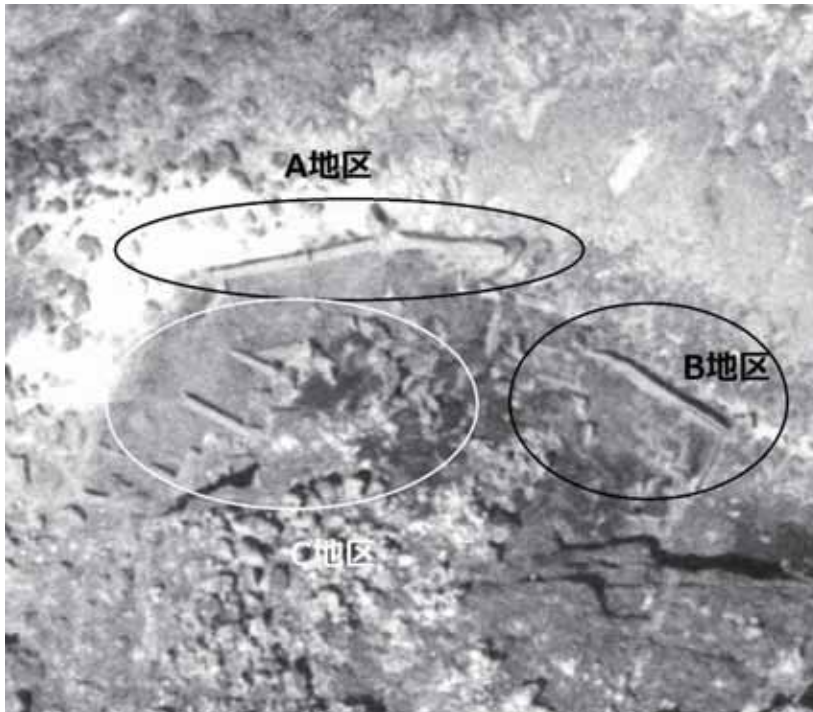


IX、南小島古賀村跡 規模・形状 魚釣島上回る？

1、古賀村の石積み遺構、米軍航空写真でくっきり

規模 形状から 魚釣島の石垣積み、上回る？

米軍が撮影した航空写真にも、南小島古賀村跡の石積みはくっきりと写っている。



昭和 20 年 3 月米軍が撮影した南小島空中写真。古賀村跡近辺付近を拡大。
(沖縄県公文書館)

南小島の石積みは、規模や形状からして、魚釣島のそれを上回っているのではなかろうか。石積みの大きさを計測した資料がないので、写真で両者を見比べた感じからである。

古賀は、何のために大規模に築いたのだろうか。海鳥事業だけではこんなに必要としたのか。別の事業目的もあって築いたのか。前掲の洞窟入口前広場の写真を「南小島漁業場」と明記されていたのは気になる所である。

ともあれ、南小島の石積みは広範囲にわたっている。

3つのグループ、海岸手前の石積み（A 地区）、海岸山手斜面の石積み（B 地区）、③（C 地区：A 地区の後方）の石積みに分けて、見ていくことにしたい。

遺構は、道路、石積み・屋敷、神社、等々がある。



生活物資を運搬した道路であろうか、実に見事な石積みである。（新納義馬.1980）



広範囲に点在する住居跡の石積み、放棄されて100年は経過したであろうか、今外部から住居跡を確認することは、植物に被われて至難の業である。（仲間均.2002）



恒藤博士の集落見取り図(上)を見ると神社がある。丸みを帯びた石がきれいに敷き詰められている。奥にあるのは、この神社跡か。

(仲間均.2002)



島で亡くなった開拓者の墓所か？ 岩をくりぬいて丁寧に造られており、共同の墓所だったのか。この写真から中の様子は分からない。調査が待たれる。(同上)